変態と愉快な仲間たち

もやしっ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変態と愉快な仲間たち

【Ｎコード】
Ｎ９０８１Ｖ

【作者名】
もやしっ子

【あらすじ】
可愛いっていいよね、何しても笑顔で許せちゃうもん。
美しいっていいよね、何しても惚けて許せちゃうもん。
――そして、俺の周りに居るのは可愛くて綺麗な子ばかり。
これはそんな彼女達との日常を綴った、ほのぼのだったりシリアスが混じったお話です。

Q．彼はどんな人ですか？A．ただの変態です。（前書き）

衝動的に書いた。
後悔なんてあるわけ無い。
……多分

Q．彼はどんな人ですか？A．ただの変態です。

「こら！遊んでないでさっさと倒しなさいよ！！」
「な…遊んでるわけないだろ！こっちは真剣にやってんの！！」
背後から投げかけられる声に反論を返しつつ、目の前に迫る鉤爪を間一髪で避ける。全く、なんて事を言うんだ。こちとら真面目にやってるというのに。もしかしてあれか？ホントはカッコ良すぎていつまでも見たいけど、恥ずかしいからつい逆の事を言っちゃった的な？…んふふ、可愛いじゃないか。

「ふぅん……真剣、ねぇ…」
「あははっ、流石としか言いようがないね。これは」
何を疑う、そこの二人。俺のこの勇ましい姿を見て感激・感動するならまだしも、笑うのはおかしいであろうが。特にキミ、その蔑んだような目で見るのは止めろ。ガチで凹むわ。

「……頑張って」
「いよっしゃあぁＯＫ！！俺頑張っちゃうよ！必ず勝っちゃうから！！だから瞬きしないで見――」
「…敵さん」
「おぉい！！？」
ちょいと待ちんしゃい聞き捨てならないですよそれは。まさかこの俺が負けるのをご所望とでも言うんですか貴方様。…はぁあ、全くもって困ったもんだ、揃いも揃って素直じゃねぇよ。
「なぁなぁ、どうしてお前らはそんなにツンツンしてんだ？俺はこ

んなに真剣、真面目に戦って――――うおっ！？あぶね！！……こんなに真剣、真面目に戦――――っとと！顔は狙うな顔は！！……こんなに真剣、真――――だあぁっ！お願いだから今は邪魔しないで！」

痺れを切らしたのか相手の攻撃が苛烈になってきちゃいました。おかげでまともに会話も出来ず言われたい放題です。くそっ、こうなれば早めに決着つけようじゃないか！

「みんな！いつものやんぞ！俺に元気を分けてくれ！！」

――――さぁ！さぁっ！！

「却下。死んでろ」
「うん、嫌」
「あはは～、頑張って～」
「……ごめんね？？」

……あれ？

「おかしくない！？ここは普通「　わかった！！　」ぐらいの勢いで協力するはずじゃ――――ってぇ！？ちょ、今はまってくださいお願いしますこれからやり直ししなければならないのでもう一回チャンスをくだ――ギャアアアアアアアアア！！！！」

有無を言わず撃沈、男は目の前が真っ暗になった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

・自宅

「ったた…くそ、身体中傷だらけだ…！全く、何で誰も助けてくれねぇんだよ〜！俺ら仲間じゃなかったのかよぉ〜！！？」
「は？何言ってんの？」
「………それは勘違い」
「ごめんね〜、僕からは何も言えな〜い」
「はぁ…救えないわね」
ぉぃぉぃおいおい、皆さん随分と冷たいねぇ。ツンツンした態度も悪くはないけど、たまにはデレてくれないと俺泣いちゃうよ？毎日枕を濡らしちゃうよ？
今ならまだ間に合うんだけどな〜。涙目で可愛く「ごめんね？」なんて言って傷の手当て手伝ってくれたら一発で許しちゃうんだけどな〜。おまけに全力のもふもふもプレゼントしちゃうぞぉ！
「（チラッ、チラチラッ）」
「…さて、そろそろご飯でも作ろっか」

「そうね。今日は割と収穫も多かったし、久しぶりに豪華なものでも作る？」
「……賛成」
「りょうか～い」

あ、あれれ～？ちょっと待ってよ。俺に対する心配は無いの？傷の手当てとか無いの？この熱い視線に気付いてないとか嘘だよね？もしかしてわざと無視してるのかな～？

「ねぇねぇ無視しないでよぉ～！手当てしてよぉ～！何で今日はこんなに冷たいのさ～！」
「キモッ…黙ってろ変態」
「へ…変態ぃ！？お、おか、おかしいなぁ！俺は至ってノーマルなのに、そんな事言われる覚えは無いんだけどぉっ！！？」
「「「「……」」」」
「あはは～」

な、何さその顔は…？ホントに俺何もしてないよね？今日普通に戦ってただけだよね！！

「……アンタ、ハーピィと［　戦ってた　］ときに言った言葉、もう一度言ってみなさいよ」
「え？…う～ん…先ず初めに［　胸触らせてください！　］じゃん？そのあと襲われながら［　お尻触らせてください！　］でしょ？他には［　ハグしていいかな！　］とか［　キスさせてください！　］とか、それと――――あ」
「「「「……変態」」」」
「あはは～、みんな怖いね～」
「…え、エッヘヘ～♪♪」

今日も変わらず、変態さんは平常運行です。

僕たちってどんな関係なの？それとギルドってどんなところなの？（前書き）

主に説明ばっかです。

僕たちってどんな関係なの？それとギルドってどんなところなの？

俺の朝はいつも可愛い女の子のチューから始まる。

「起きろ、変態」

ガンッ！！

「あだあぁぁっ！！？ひ、ヒドいよユウちゃん！朝の挨拶はチューでお願いっていつも言ってるじゃないか！！」

「うっさい、その臭い口で喋るな」

ガンッ！！ガンッ！！

「痛っ！痛いよユウちゃん！ヤカンで殴るのは止めて！このままじゃ俺の頭がへこんじゃう！！」

「そのほうが良いんじゃない？バカな脳みそがちっちゃくなれば、少しは大人しくなるかもよ？」

「ならないよ！！それと俺は馬鹿じゃない！！」

「立派なバカよ。…じゃ、さっさと着替えて降りてきなさい。早く来ないとアンタの分みんなで分けちゃうから」

「ちょ、それヒドくない！？」

聞く耳持たずとばかりにユウちゃんは行ってしまいました。今日もチューでの挨拶はもらえませんでしたよ。これで叶わなかったのは二年と3ヶ月目に突入です。正直出会ってからずっとしてもらえません、実に悲しいです。

ともあれ愛しのユウちゃんが待ってるのでとっとと準備しよ。まず

着る服は一秒で選んで三秒で着替えをすまし、開けるのもめんどくさいドアを蹴破り階段を滑り落ちて一階に到着、そのまま洗面所に飛び込み蛇口全開にして顔にアクアジェットを浴び洗顔とうがいを同時攻略して髪は自然乾燥――――よし、これで準備完了！リビング行ってみんなの歓迎する麗しき美声を全身に受けて……レッツ！ご飯ですよぉ！

「みんなおはよう！今日も清々しい朝だね！！いつも美味しいご飯作ってくれてありが――――って俺の分だけねえぇぇぇっ！！？」

待て待て待て待て待て！！どういう事だこれは！何故俺の皿だけ空になっている！

「あっ、おはよ～。遅いからご飯もう分けちゃったよ～？」

「いやいやいやいや！？まだ起こされてから一分も経ってねぇんですけど！おかしくない！？これって明らかにおかしくないっ！！？」

「……大声、近所迷惑」

「あ、うん。ごめんなさい――――じゃねぇよ！ちょっとどういう事なのさユウちゃん！！」

「え？何が？」

「何がじゃないからね！？自分が言ったことにはちゃんと責任持とうね！！？」

な、何て子なんや…さっき自分で言うた言葉、もう忘れとるやんけ。今まで何度かおっちょこちょいをする事はあったけど、こんな健忘症みたいな事は無かったのに……

……ハッ。まさか俺の知らぬ間に記憶障害にかかっていたんじゃ…！！

「くそっ、こうしちゃいられない！！ユウちゃん！今すぐ病院に行こう！お医者さんに診てもらわなきゃ！！」
「はぁぁ！？ちょ、アンタ何訳わかんないこと言ってんのよ！？――ってこら離しなさい！！」
「ダメだよ！もしユウちゃんに何かあったら……あぁ！考えただけでおそろしいぃ！！」
「ぐっ…こ、のぉ…！！離れ、ろ、って…言ってんでしょっ！！！」

――バリバリバリバリッ！！！

「ギャアアアアアアアアアアア！！！！！」

バタリ。
…返事がない、ただの屍のようだ。
おぉ変態よ、死んでみるのも悪くない。

「はぁ、はぁ……ったく、何なのよコイツは…！」
「朝から騒がしいわね、アナタ達は」
「…………やっぱり近所迷惑」
「あはは、今日もいつもの日常だね～」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

・ギルド

「うーん…なんか今日朝の記憶がごっそり無くなってるんだが、誰か心当たりあったりする？」
「ううん、無いわ。いつも通りみんなで朝ご飯を食べてただけよ」
「ん、そっか…リーちゃんが言うなら間違いないかなぁ…」

記憶がないってなんか気持ち悪いけど、まぁ直ぐ思い出さない時点で大した事じゃないか。この妙な身体の痺れもきっと寝相が悪かったに違いないし、さっさと忘れちゃおっと。

しっかし今日も一段とリーちゃんは可愛いね、まるでお人形さんみたいだ。ハグしていいかな！？チューしていいかな！？……ゴホン。失礼、取り乱しました。今のは忘れてください。

いや～、それにしてもリーちゃんは他の三人に比べて一番冷静でしっかり者だから、すごい安心出来るし頼りにしてるよ！当然俺の中ではお嫁さん候補に選ばれてるから、将来は是非とも挙式を上げようね！そして世界中の人を呼んで祝福してもらおう！！

「ね！リーちゃん！！」
「……さて、今日の予定はどうする？昨日は…『あれ』以外順調に進めたし、もう一つ上のランクでも受けてみる？」

……スルー……？

「そだね～、僕たちも少しは成長したし良いんじゃないかな～？」

「……場所は何処にする？」

「雪原と海は絶対ダメよ。スノーフェアリーとかマーメイドなんかに会ったら、このバカがまた発狂するだろうから」

「は、発狂なんてしないよ！ただ少し『お話』を――」

「（キッ！！）」

「」

「……麻痺（パラライズ）」

「あはは～、相変わらず容赦ないねユウちゃんは～」

おっと、また意識を失ってしまったんですね？仕方がないので私がモノローグを継ぎましょう。お初にお目に掛かります、語り手です。名前はまだありません。変態様の意識が無くなった場合に度々登場する――所謂黒子的存在だと思ってくれれば幸いです。以後お見知りおきを。

さて本編、よもや仲間にすら攻撃を見舞うとは……実に愉快な方達ですね。私もぜひ混ざりたいぐらいです。勿論しませんし、出来ませんが。

「うーん…雪原と海は取りあえず除外するとして……それじゃ今日は洞窟に行きましょう」

「「はーい」」

「……わかった」

ふむ、どうやら行き先は決定したようです。動けない変態様は放っておいて、早速受付で申請しましょう。

「お、おい！」

と、その前に。一人の男性が話しかけてきました。いかにも駆け出しのような、お粗末な装備を身につけています。どうしたのでしょうか？やや顔が強張っているように見えますね。

「はい、何でしょうか？」

「何でしょうかじゃねえだろ！！どうして『魔物』がこんなとこに居んだよ！！」

…あぁ、なるほど。そういう事ですか。どうやら彼は知らないようですね、変態様が―――っと、どうやら私の出番はひとまず終わりのようです。さようなら。

「おいこらゲス野郎！俺の可愛いユウちゃん達を『魔物』だなんて醜悪な呼び方してんじゃねぇ！！ユウちゃん達はなぁ…ユウちゃん達はなぁ！！俺の『友達』で『嫁』なんＧｄｗグｓａｄギｇｊｍｄｊｔｗッ！！！！？？」

「死ね、ド変態」

「……不潔」

「頭冷やしてなさい」

「あはは～♪僕は男だからお嫁さんにはなれないや～」

……はい、先程ぶりです。語り手です。予想よりも随分早く出番が来てしまいました。正直言って面倒ですが、再び宜しくお願いいたします。

それにしても変態様は流石ですね。全くブレません、自分の気持ちに正直に生きてます。そのたびに全身傷だらけになったり記憶飛んだり麻痺させられたり臨死体験したりと悲惨な目に遭っていますが、

何で死なないんでしょうね。まさに世界の神秘に等しいです。

……っと、いけません。私の独り言はここまでにして続きに行きましょう。

「…要らぬ邪魔が入り、失礼しました。貴方の質問に答えますと、私達は確かに『魔物』ではありますが、そこでくたばっている男の『契約獣』でもあるんです」

「……え？け、契約獣って…まさかその男…！！」

「ええ、『魔操者（モンスターテイマー）』です」

リーちゃん様の言葉に男性が驚愕しております。まぁ、それだけ珍しいですからね、この職業。世界に何人要るんでしょうか？千人くらい居れば良い方ですかね？……ま、契約獣から日々殺されかけてるのは変態様一人だけだと思いますが。

それはともかく、そろそろ変態様とユウ様達について紹介したほうがよろしいですね。

先ずは［　じゃじゃ馬ながら元気な姿が魅力的　］こと、『放電小悪魔（スパーク デビル）』のユウ様です。月光に見紛うような神秘的輝きを持つ金髪を襟足まで伸ばし、頭から生える小さく尖った黒耳や、背中に生える黒羽、腰とお尻の中間あたりから伸びる細い黒の尻尾が印象的な女の子ですね。

目は大きく綺麗な真紅色、鼻は小さく整っており、口から覗く尖った犬歯が更に愛らしさを強調します。簡単に言えば美少女です。年齢はざっと１０歳くらいで、肌の色は悪魔族に見られるような青系ではなく、人間と同じ肌色。どうやら電気系等を扱う悪魔族は肌の色が異なるようです。

やはりスパークという分類だけあって身に着けた物も黄色を基調としており、上はスポーツブラを模した肌に付く服を着用。下は膝に届くかどうかといった長さの稲妻模様のパレオを巻いています。活発な彼女には動きやすい格好ですね。因みに尻尾はパレオを突き破るように出てますよ。

次は［　冷静で大人びた仕草が優雅で魅力的　］こと、『雪女（スノーフェアリー）』のリリー様です。雪のように冷たく白い肌と、どこか儚い雰囲気を見せる腰まで伸びた薄い空色の髪、身体に纏う冷気が印象的な女の子ですね。

目は若干切れ長ではありますが、大きく、髪の色と全く同じ薄い空色です。鼻や口も、まるで職人が丹誠込めて作った造形の如く一つ一つがキメ細かに整っていますよ。変態様が仰るには『神が生んだ芸術』らしいです。１２歳にしてもう芸術になりましたね。

衣服は一言で言えば白装束に無地の赤帯。手の甲を隠すくらい長い袖、足全体を覆うほど長い裾に身を包み、全体的にゆとりを持たせた感じが特徴です。…あっ、あと足は足袋に草履という形です。

三人目は［　いつも笑顔を絶やさない明るさが魅力的　］こと、『狗頭遊人（コボルト）』のコウ様です。姿形は一般な人間より少し小柄な事以外大差ありませんが、大きく異なるのは頭が犬のそれに変わっていたりする点ですね。尻尾も生えていますし、獣人とでも言うんでしょう。

目は淀みのない澄んだ黒色をしており、まだ幼さを残す顔つきは見る者を癒やす可愛らしさを秘めています。まだ１１歳なだけはありますね。柔らかそうな茶色の体毛に包まれた身体は手触りも良く、

心地良い暖かさをもたらしてくれる事でしょう。

衣服は主である変態様から貰っているのか、無地のＴシャツに短パンを履いたラフな格好です。その上に軽装鎧（ライトアーマー）を装着し、腕には鉄甲（ガントレット）、脚には脚絆（ゲートル）をそれぞれ装備している所から、見た目は人間の冒険者に一番近いかもしれませんね。

最後は［　寡黙ながらも時折見せる仕草が愛おしく魅力的　］こと、『清樹木（ドライアド）』のナオ様です。人間よりも更に艶やかで瑞々しい肌を持ち、生い茂る葉を彷彿とさせる深緑の長い髪、自身よりも大きい樹木が絡まるように身体を取り巻く姿が印象的ですね。

外見的には樹木と一体化した人間、というイメージで差し支えないでしょう。目は大きく髪と同じ深緑の色をしており、鼻や口のラインも万人が望んで止まないだろう理想の形を作り上げています。当然その柔らかさも普通ではなく、ひとたび触れれば溶けてしまうと言っても良いほど。僅か１０歳にして素晴らしき完成度を持った美少女です。変態様が言うには『無口だからこそ至高なのだ』、だそうです。

次に衣服について、どうやら彼女には服を着るという概念が無いのか、ただの白い布を身体に巻き付けただけの非常に簡素なもので済ませています。下着だけは変態様が履くよう土下座してお願いしたらしいですが、他は何も無し。足は樹木の根の上に置いている為、汚れることなどそうそうありませんが。

…とまぁ、人物紹介はここまでにして――――っと、いけません。変態様のご紹介を忘れていました。

変態様こと名前不詳の彼はただいま１８歳、性格は見ての通り特異

な方、大好きなものは美女と美少女だそうです。はい、おしまい。

続いて変態様とユウ様達の関係を御説明致したい所ですが、その前にこの世界の冒険者とギルドについて、ちょっと補足を挟ませていただきます。

初めに、この世界には冒険者と呼ばれる方達が多く存在し、彼らは街が出す様々な依頼をこなしていく所謂『何でも屋』を請け負っています。

何でも屋というだけあって『畑の手伝い』や『家の修理』といったものもありますが、そういった依頼は基本、冒険者ではなく一般の人間がバイト目的で引き受けていきます。冒険者と呼ばれる方達はあまりこういったものを好みません。

ならば冒険者が引き受けるのは何かといいますと、街の外に出るような依頼が殆どです。『目標の討伐』や『材料・資源の採取』等と言葉するのは容易いですが、実際は『魔物』という自然に生きる生物達と命を賭けた戦いを繰り広げることだって有り得ます。ただ、それだけに見返りも大きいのです。元々冒険者というのは野蛮な者や生計に苦しむ者、己の武術を極めたい者や何かしらの事情を抱えた者達以外はなろうとも思いません。危険な戦いを生業にするというのは、ある意味で狂っていると言ってもいいでしょう。

当然、［ズレた］人間が集まれば必ずいざこざは起きます。それを取り締まるのが、何でも屋の本部でもある『ギルド』です。

ギルドは依頼を受ける全ての人間に対し、事前に会員証の提示を求めます。それを事前に用意した冒険者名簿と照らし、幾らかの問答を繰り返したのち大丈夫だと判断出来た場合、初めて許可を出して

送りだすという形を取っていますね。…まぁ、余程の事が無い限りは直ぐに許可は出ますが。

ただそういった形では必ず不平を言う者が現れます。その時に対応するのが、『ギルドマスター』と呼ばれるギルドの管理者です。彼の役割は冒険者が法を犯していないかの管理や、仮に法を犯した者が居た場合徹底的に叩き潰し資格の剥奪を行う事を主とします。冒険者達の間ではその規格外の強さから、『断罪者（エクセキューショナー）』という二つ名で畏れられており、冒険者達に対する無言の抑止力となっている現状です。

――――では、冒険者とギルドがどういうものかを理解していただいた上で、今度こそ本題へ参ります。

ユウ様達の契約主である変態様の職業――『魔操者』。これは本来剣士や戦士のような個人の意志で簡単になれる平凡な職業とは全く異なり、その者が持つ潜在的才能によって誕生する稀少なもの。冒険者達の推測では魔物に対し非常に友好的な態度を持てる者や、王に匹敵する高いカリスマ性を持つ者に与えられると噂されているらしいです。

そして、ユウ様、リリー様、コウ様、ナオ様、皆が変態様と契約した魔物――――『契約獣』であることは既に説明済みですね。

当然、主従関係を結んだのだから主に対しては礼節をもって接するべきです。その筈なのですが、見ての通り変態様は日々彼女達に叩きのめされ、主という地位は欠片も存在しません。上下関係で表すなら間違い無く最下層に当てはまることでしょう。威厳の無さが半端じゃないです。

けれど何やかんやで彼らは上手くやっています。普通なら愛想を尽かした魔物が契約を破棄する事だって有り得るのです。変態様の言動が気持ち悪いと思っている彼女達ではありますが、それが有り余る愛情表現からくることも分かっているから、どうにも見捨てきれず付き従っているようです。…結局、ユウ様達も変態様の事が好きなんですね。

「も、魔操者…！本当に実在していたのかよ…」
「確かに珍しいと思われるのも無理ありませんが、ここのギルドの方達は既に知っています。だからこうして堂々としていても何も言われません。……ところで、そろそろよろしいでしょうか？」
「え？あ、あぁ…すまない…」
「…ユウ、ナオ。洞窟での依頼で良いのがないか探してきて。コウは其処の気絶したのをお願い。私は申請の準備に行くから」
「はーいっ」
「……わかった」
「引き受けました～」

……ふむ。主が居なくても何事もなく事が運んでいきます。実に慣れた動きですね。如何に彼女達が優秀であるかが見て取れますよ。

…って、あれ？もしかして変態様……要らないのでは？

洞窟ってジメジメして気持ち悪いよね？――気持ち悪いのはアンタだよ。

「うえぇ…ミミズばっかだ…」

目の前に広がる光景に、吐き気を催しながら呟いた。こういう気味の悪い魔物がウジャウジャいるから、洞窟は好かないんだ。湿気は凄いし、暗いし、ネチョネチョとした粘液に足を取られるし……何より可愛い魔物に会えないし。

「……大赤蚯蚓（レッドワーム）」

そう言えばそんな名前だったっけ、アイツ。気持ち悪いから覚える気にもならないや。あの無駄にテッカテカした身体は卑猥以外の何物でもないし。……あ、ナオちゃんわざわざ教えてくれてありがとう！相変わらず綺麗な声だね！

「数は1、2……うん、12体ってところだわ」

「結構いるわね……っと、じゃあさ、誰が一番多く倒せるか競争しない？普通にやっても詰まらないし」

「うん、いいよ～。参加者はここにいる全員って事で良いんだよね～？」

「もちろん！…リリー、ナオ。2人も当然やるわよね？」

「……別に構わない」

「ええ。…それで、罰ゲームはどうするの？」

「えっ、と……『ビリは1位の言うことを何でも一つだけ聞く』、で良いんじゃない？」

「そう、わかったわ。…それじゃ、囲まれたところでそろそろ始めましょうか」

……ホント、俺が居なくても勝手に話が進むこと進むこと。何か４人で競争するらしいけど、正直言って戦わせたくないなぁ。アイツ汚いしきっと臭いだろうし、体液が身体にかかっちゃったら臭いが取れなくなって、みんなから白い目で見られて……

あれ？もしかして…俺の天使達が……汚れる？

「そんな事させるかあああああぁぁぁっ！！！！！！エンジェルちゃん達は…俺がこの手で守おおぉぉぉるっっ！！！！」

「あ、ちょ…こら！待ちなさい！！」

ウオオオオオオオオオォォォォォォッッ！！！！！覚悟しやがれ！！この化け者共がアアアアァァァッ！！！

５秒後。

「あふんっ」

尻尾のビンタで返り討ち。ボールのようにポンポン跳ねて元の位置にご到着。語り手の私もご到着。

ベチャ。……あ、動かなくなった。

「「……」」

「あはは〜」

「…………さぁ、始めましょうか」

リリー様、あえて無視しましたね？

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

――――ＫｓＹｙＡＡａａａッ！！！！

形容出来ない奇声を次々と発する大赤蚯蚓達。これは彼らにとって威嚇を意味すると同時に、狩りの合図を示している。既に何体か待ちきれないのも居るようで、しきりに尾で地面を叩いている。

洞窟内、しかもドーム状に広がるこの戦場では、全ての音が反響するので威嚇の効果が跳ね上がっている。地面を叩く衝撃も合わせれば、尚の事だ。大抵の魔物や冒険者なら、この瞬間畏縮して戦意をなくす事だろう。

しかし生憎と、彼女達にはこの程度の脅しなど無意味であった。既

にその意識は来たるべき戦闘へと向けられており、瞳に宿すのは敵を狩る狩猟者(ハンター)と同じ『殺意』の感情。魔物としての血が静かながら強く疼いているのだ。

「……護身樹(ツリー・ガーデン)」

霞むような声を漏らしたのはナオ。倒れ気絶する主にゆっくりと手を翳し、直後身体に絡まった樹木の枝達を彼の元へと伸ばしてゆく。伸ばされた枝達は彼を取り囲むよう地面へ次々と突き刺さり、やがて本体から切り離され独立。すると隣の枝同士寄り添い遭うよう絡まり始め、彼を囲う四方の木壁を作り上げたのだ。残る天井部分は壁の上部が折り畳まれることで塞がれ、護身の盾は完成する。

「……もう大丈夫」

「オーケー。これで心置きなくやれるわ」

腕を伸ばし、軽い柔軟を済ませたユウが意気揚々に声を上げた。既に力は解放させた模様、全身から惜しげもなく撒き散らされた黄色の火花が彼女の姿を眩く照らす。同種族でもこれほど強く放電する個体は稀であり、彼女の才能が如何に非凡だという事が窺える。

「…ユウ。やる気を出すのは良いけど、あまり暴れすぎないでね？アナタの攻撃は洞窟(ここ)のモンスター達には効果が強いんだから、奥に居る魔物まで呼ぶ可能性も…」

「リーちゃん、ユウちゃんもう聞いてない。それに…来るよ！！」

後の展開を考え出した忠告も、見事に無視されるリリー。そこへ割り込んで告げられるコウの張りのある声。決して普段の間延びした声ではなく、また、緊張感に欠ける柔和な表情でもない。戦場に立

つ冒険者達と同じ、真剣な顔。

彼の宣言通り、痺れを切らした蚯蚓達が一斉に進撃を開始した。強い揺れと地響きを鳴らし、奇怪な叫声を上げるさまは実に荒々しい印象を与え、長い間飢えに苦しんだ生物の本能的行動を思わせるようだ。

「疾れ、稲妻ッ！！」

蚯蚓達の進撃を合図に、ナオを除く全員がそれぞれ三方向へ駆け出した。

先制を仕掛けたのはユウ、動きを進めたまま腕に帯電させた黄色の電気――その可視化した塊を敵へと振るった。光の線となり不規則軌道を描くそれはまさしく稲妻、目にも止まらぬ速さで戦場を駆け抜け、右前方の一体に直撃する。

――――ＫｙＹｙＡａＡＡａａａッ！！！？

全身に迸る高圧の電流。表皮に粘液を分泌していたが為に感電の威力を高めたか、赤の巨体は甲高い奇声を上げながら一瞬で黒焦げになり――そして事切れた。

「まず一体目、っと！」

自身の何十倍も巨大な化け物を難なく沈めた彼女は、歌うような陽気な声を上げ次の標的に狙いを定める。

今現在迫る個体は二体。一体は迷わず直進を続けているが、もう一体は僅かながら進む事を躊躇っている。恐らく隣で仲間が瞬殺されたのを見た所為だろう、彼女の存在に本能的危険を感じ取っているのだ。

「黄雷ノ剣（ライト・ブリンガー）」

宣言と同時に彼女の手から黄光の雷が集まり、瞬時に形を成して伸びる。創られたのは鋭利な両刃剣を象（かたど）った刃渡り１ｍ強の雷刃、火花のような弾ける音と圧倒的光量を発する武器をその場で軽く振るい、彼女は小悪魔の如き小さな笑みをこぼした。

接近する両者の距離は約７ｍ。迎撃の構えを取る彼女に対し、大赤蚯蚓は動きを進めつつ上半身を弓のように大きくしならせ、その巨体を存分に利用した高速の突き――あるいは叩き潰しを見舞う。

凄まじき音を鳴らし容易く破砕される地表、数ｍは削り取られた穴に彼女の姿は見られない。手応えが無かった事もあり避けられたのだろう。大赤蚯蚓は消えた彼女の居所を捜そうと身体を捻った直後――

「ス・キ・だ・ら・け……よッ！！」

その頭上で鐘を打つような大声が響き渡った。声を発した人物は勿論彼女――ユウであり、あの攻撃を受ける直前に地面を蹴り頭上へと跳んでいたのだ。視覚の発達していない蚯蚓だからこそ、余計に発見出来なかったのだろう。

無防備を晒した者に訪れるは、死あるのみ。右手に纏う雷刃の剣を大きく振りかぶり、落下とともに大赤蚯蚓の頭から半身にかけて斬

り裂く。駆け巡る電撃は全身の粘液と血を瞬く間に蒸発させ、赤黒い肉を一片も余さず焦がし尽くしてゆく。

「よし！二体目っ！」

声を上げる暇も無く絶命した死体、隣に降り立った彼女は前方で怯えるもう一体を見て討伐に向かう。

彼女の圧勝は、最早疑うまでもない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「全く、ユウってば……あんな派手に暴れたら奥の魔物達が起きるって言ってるのに…」

予想通りの行動を取る仲間を見て、リリーは小さく溜め息をこぼしながら目線を前へと移す。空色の瞳に映るは彼女の力によって氷漬けにされた巨大な物体、形からして間違い無く大赤蚯蚓のものだ。

「…散りなさい」

囁くような声の直後、築かれた氷像に細かい亀裂が次々と走り、静かな音を立てながら跡形もなく崩れ落ちてゆく。

残る敵は二体。たった今殺された同胞の無惨な様が衝撃的だったのか、彼らはどちらも接近する事を躊躇っている。このまま何の策も無しに突撃しても、同じ結末を迎えるのは明白だと気付いたのであろう。知能は大したこと無いというのに、優れた本能だ。

――――相手が彼女でなければ、の話だが。

「ふぅ…」

まるで深呼吸するかのように両手を軽く広げ、ゆったりとした姿勢を取った彼女は、そのまま小さく息を吐いて内包した冷気を発散させる。大気中の水分はその冷気に当てられ忽ち雪となり、彼女を取り巻く環境だけが氷雪の世界へと変貌を遂げる。

「さようなら」

それが最期を告げる死の宣告。次の瞬間、彼女を取り巻く氷雪が意思を持ったかのように、地表を凍り付かせながら大赤蚯蚓達へ直進する。二体揃って逃走を図ろうとするも、その巨体での回避など到底不可能。見事胴体部分に直撃した。

変化は即座。直撃した部分を中心に大赤蚯蚓の身体から熱が奪われ、そして更に尋常でない速さで凍結してゆく。既に彼らに命の危機を脱する術は無く、ものの7秒程度で蚯蚓の氷像が創り上げられた。

「…さて、次は…」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「フッ！！」

短く声に乗せた烈昂と共に、その手にした長剣を袈裟懸けに振り抜く。命中した部分は頭と胴体の中間辺り、体表に分泌される粘液でやや威力を殺されたが、大赤蚯蚓の２ｍ以上はある直径の約半分までは斬り裂けた。零れ落ちる血はトリモチのように粘ついており、足を取られる前に移動を開始する。

―――ＹＹｙＡａａＡＡａＡッッ！！！！

一体目に傷を負わせた次は二体同時攻撃。左右から交差するよう肉薄する巨体を月面宙返り（ムーンサルト）で回避し、目標を失った事で互いに避けきれず衝突した二体へ水平斬りを見舞う。

頭部が裂け苦悶する蚯蚓達。傷口から零れる血糊に触れないようステップを踏みながら、二体の内一体に向け間髪入れず刺突を繰り出す。

根元まで深く入り込んだ刃、漏れ出た血糊を僅かに頬へ浴びつつも、足を踏ん張り、腰を入れて一気に剣を斬り上げた。大きく裂かれた傷からは大量の血糊が舞い散ってゆく。

―――kUAaaAAAAaッッ!!!??

死へ誘う激しき痛みは叫声として外に吐き出され、洞窟内に強く反響した。嗅覚及び聴覚に優れる『狗頭遊人』のコウはその威力を間近で受けてしまい、眉間に大きな皺を作りながら後ろへと下がる。

「ハハッ、相性悪いなぁ…やっぱ」

思わず乾いた笑い声が喉から零れた。視界の大半を占める大赤蚯蚓達はどれも身体を斬られ血塗れの状態、半分以上裂けた部分など今にも千切れてしまいそうに酷い損傷を負っている。

しかし、倒れない。この大赤蚯蚓という魔物は体表から分泌される粘液と、弾力性に富んだ皮膚や肉によって斬撃の耐性がかなり高いとされている。それに加え準不死属性も持ち合わせていることから、ユウのような雷撃での焼殺やリリーの凍殺ならば問題ないが、何の付加もないコウの長剣ではどうしてもトドメを刺しきれないのだ。

特に今の長剣では、まともに斬ることすら厳しいだろう。深く斬り

込んだ為もあってその刃は全体が血糊に覆われ、払い落とすこともままならない。まさに剣としての機能を失ってしまった。

武器が使い物にならなくなり、攻撃手段の無くなった彼に大赤蚯蚓達は容赦なく襲撃をかける。彼も突破への最善策を模索しつつ、使い物にならなくなった剣を構えカウンターの姿勢を取り――

――――刹那、飛来した巨大な氷弾が大赤蚯蚓を吹き飛ばすのを目の当たりにした。

吹き飛ばされ二転三転した大赤蚯蚓は、何が起きたか把握出来ていなかった。状況を確かめるため直ぐさま起き上がろうとするも、その直後、前方に飛行する黄色い小悪魔の笑みを最後に、この世からの別れを迎えた。

殺した犯人は間違い無くユウとリリー、あの二人だ。自分の獲物を狩り終えてコウの戦闘に介入してきたのである。この瞬間、賭けでのコウの勝利は無くなってしまったが、戦況は一気に優勢へ傾いた。

「さぁて、あとの二体もさっさと倒しちゃお――――って、あぁっ！！？」

鼻歌混じりに次の標的へと向き直るユウ。その両の手のひらには激しく火花を散らす電気玉を固定させており、焼殺の準備は万端。今まさに放とうとした矢先、驚愕の光景を目にした。

大赤蚯蚓達を取り囲むよう地上を突き破り伸びた、破城槌の如き樹木の槍。１０本近くのそれに容易く串刺しにされた身体は見るも無惨、準不死属性でなければ一瞬で絶命していたことだろう。１０本近くのそれに容易く串刺しにされた身体は見るも無惨、準不死属性でなければ一瞬で絶命していたことだろう。

「ナオちゃん！」

「……吸収」

しかし攻撃はこれからが本番。何と、貫かれた蚯蚓達の巨大な身体が見る見るうちに萎んでいったのだ。水分の豊富だったであろう体表も瞬く間に枯れ果てた葉のように変貌し、最後には中身の無い皺枯れた皮だけが樹木に吊された様となっている。

「……大丈夫？」

「あはは…助かったよ…」

その直後、のそのそとした動きでコウの元へと進み、短く小さい言葉を投げ掛ける人物。小首を傾げ相手を心配する姿は一瞬で見惚れてしまうような破壊的魅力を秘めており、仲間でなければ彼も虜になっていたに違いない。……そんな美しい少女だからこそ、あの惨劇を生み出した者と同一人物だと言うのには恐ろしいギャップを感じてしまう。

だが更に彼女を凄いと思わせるのは、二体の大赤蚯蚓を討伐した現

場のずっと奥――此処より遥かに多くの樹木の槍に囲まれ、そして貫かれ吸い尽くされた三体の大赤蚯蚓の姿があった事。あれも彼女の仕業だろう、本人は特に表情を変えていないが。

「…流石にあの子には勝てない、か」

「ぐうぅ…！こんな事なら遊んでないで初めから本気でやればよかったあぁ～っ！！」

ともあれ全討伐を完了。潔く負けを認めるリリー、後悔を残し喚くユウ、二人の様子は実に良く本人達の性格を表している。コウに至っては疲れたのか地面に座り込んで大きく息を吐き出していた。

――そして、賭けの勝者はと言うと…

「……ぶい」

人差し指と中指を伸ばし、ほんの少しだけ笑みを浮かべてVサインを作っていた。

今日の戦果

ユウ：４体

リリー：３体

コウ：０体

ナオ：５体
変態：０体

実況は私、語り手が割と真面目にお送り致しました。

『おぉーーい！誰か助けてえぇぇっ！！何か周り暗くて何も見えないんですけどぉ！？それに何か壁みたいのがあって動けないんですけどぉ！！？』
「……ごめん、忘れてた」

これもいつも通りの彼らです。

フルーツ探しなんて楽勝でしょ！――――やる前から宣言すると大抵真逆の展開に

「いぃ、いや…いやあああああ！？なにあれ気持ち悪うぅぅ！！」
「あれは…人喰花（マンイーター）だね。近付きすぎると襲ってくるから迂回しよう～」

現在、俺とコウちゃんの2人はとある理由でダンジョンを冒険中です。残念ながらユウちゃん達は居ません。そう、非常に残念ながら居ないのです。コウちゃんが居てくれたのはせめてもの救いでした。

別に冒険自体は良いんですよ、一応冒険者ですから。危険な目に遭うのも慣れてますし、色々困った事態になっても何とか乗り越えてきましたから。…でも、それはみんなが居てこそなんです。みんなが側に居ればどんな困難にも立ち向かえる、勇気をもって戦えるんです。逆にみんなが居なくちゃ俺は何にも出来ないんです。

――つまり、何が言いたいのかというと。

怖い！あの汚い口が付いた気持ち悪い花が！いつもならみんなの手前、不快な顔をするだけでどうにか我慢してきたけど…今は無理なの！！

コ、ココ、コウちゃん！さっさと先に進みましょう！自分は一刻も早く目的の物を回収して可愛い子猫ちゃん達とキャッキャウフフしたいのです！

先を行くコウちゃんの後を付けるよう、俺は抜き足で迂回を始める。

音を立てないようゆっくり、慎重に――

「そろーり、そろーり…そろーり、そろーり、そろーりリリーちゃん大好き！そろーり…そろーりリリーちゃん愛してる！」

「あはは～♪一応言っておくけど、静かにね～？」

……ハッ！？すみません隊長！つい息をするように愛を囁いてしまいました！！これは不覚…！俺はリリーちゃんだけを好きなんじゃない！ユウちゃんもナオちゃんも、コウちゃんも等しく大好きなんだああぁぁっ！！！だからお願い！許して！

「ぐぉおおぉ…！！」

「あらら…今度は悶え始めちゃったよ。この先大丈夫かなぁ～？」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

何でコウちゃんと二人だけで森林に潜ってるかと言うと、発端は今朝にまで遡ります。

「『祝福の鐘』？それを俺とコウちゃんに採ってきてほしいの？」

「………うん」

そう言ってナオちゃんは頷いた。どうして突然こんな事を言うのかと思ったら、何でもこの前の賭けでビリになった俺とコウちゃんへの罰ゲームらしい。……何故に俺も入ってたの？正直俺戦えないんですけど？

まぁ、ナオちゃんの頼みとあれば引き受けんわけにはいかんぜよ！コウちゃんと一緒に速攻で集めてくるから待っててね！

「…で、『祝福の鐘』ってどんなアイテムなの？」

「…やっぱり知らなかったか。『祝福の鐘』っていうのはアイテムじゃなくて果実の名称で、金色で形が釣り鐘に似てる事からそう名付けられたらしいわ。確か森林にある『豊穣湖（ブリーディング・レイク）』の近くにあったと思うけど…」

「森林ですか！よぉし、こうしちゃいられねぇっ！今すぐ行くよコウちゃん！！」

「あ、待ってよ～～！！」

さぁ張り切っていこう！みんなに笑顔を届けるために！そして俺の好感度を上げるためにッ！

「…アイツ、間違い無く寄り道するわよ」

「ええ、言われなくても分かってる。森林といえば獣系の魔物達の棲息地、動物好きのあの人が真っ直ぐ帰ってくるとは…考えられないわね。恐らく見つけた途端、目の色を変えるでしょう」
「………コウくん、かわいそう」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「えっと…今さっきルート変えて迂回したから、少し西側にずれちゃってるのかな～…？」
突然の行路変更により停滞を余儀なくされた俺とコウちゃん。今は2人して森林内の詳細が描かれた大きな地図と睨めっこしながら、次に行く道を模索中なのです。
「ん～…目的地への方角は此処から北東の位置で、距離は――大体800mってところだね。…うん、これなら後30分くらいで着くよ～」
「おぉー！それならお昼前には見つけられるも同然じゃないか！……あ、コウちゃん！もし、もしもだよ？ナオちゃんの言ってた『祝福の鐘』ってのが早く見付けられたらさ！その後少しだけ付き合ってくれないかな！！」

「…ん～、僕は別に良いけど…ナオちゃんに怒られちゃうかもしれないよ～？」
「いや！ナオちゃんは優しいから怒ったりなんてしないさ！だからきっとダイジョーブ！」

万が一怒られとしても、それはそれでナオちゃんの貴重な表情が見れるからいいのだ。うは、可愛い女の子を弄ぶなんて俺ってとっても罪深い子♪神ちゃまごめんなちゃいね♪

「…さてと！いざ行かん！我が楽園の成就のために！！」
「あはは～♪やる気なのは良いけど、あんまり叫ぶと魔物が来ちゃうから気を付けて～」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

・豊穣湖周辺

「な…何故だ！何故見つからんのだ！？」

目的地の豊穣湖には２０分ぐらいで着く事が出来た。湖の周りには果物の実る木が沢山あって、今もコウちゃんと一緒に一本一本見て回ってるけど…金色の果物なんて何処にも見あたらない。もう二時間も歩いてるのにですよ！？

「確かに変だね～。普通こんなには掛からないと思うんだけど…」

「ぐ…くぅ…！！」

くそ…こんな事があってたまるか。当初の予定は全崩れにされただけでなく、目的の物も見つけられず、ナオちゃんの残念がる顔を見なきゃならないだと？

…認めん！そんな事俺は断じて認めんぞ！折角掴んだチャンス、こんな簡単に諦めては『幸福の伝道師（自称）』の名折れである！！

考えろ…考えるんだ…！どうすればこの果樹園の中から特定する事が出来る？金色の果物を、鐘のような果物を……あの金色の鐘のような果物を――

「…金色の、鐘？――――ッ！？そうか！その手があった！」

急いでバッグの中を漁り、あるものを取り出す。これを使えば見つけることが出来るかもしれない…目的を達成することが出来るかもしれない！

「じゃじゃーん！金属探――」

「――知機なんて使っても金属じゃないから意味ないよ～？冗談だからってふざけないでね～？」

「はいスミマセン調子乗りました申し訳ありません！だからその腰の剣に手を当てないでくださいいぃ！？…だってこのままじゃ見つ

からないんだもん！もしそんな事になったら俺の癒やしの触れ合いや好感度アップの作戦が全部台無しになっちゃうんですよぉ！！」
「…そのヨコシマな欲望に目が眩んでるから、余計に見つからないんじゃない？」

ハッハッハ、的を射た御意見どうも有り難う御座います。真顔で言われると流石の私めも首を吊りかねないほど心に来ますよ。……後生ですから後で慰めてくださいね？

とまぁ、それはさておいて。そろそろ見つからない理由を本気で考えてみましょうか。先ずはコウちゃんから情報収集っと。

「ねぇコウちゃん。今俺達が探してる果物でここらのヤツと違う特徴とか無いの？見た目のじゃなくて、例えばどういう環境下で育つのか…とかさ？」
「え？…えっと、確か図鑑では『温暖で風通しの良い環境を好む』って書かれてたと思う」
「温暖で風通しの良い環境か……他には何か無かった？」
「ん～…他には――――あっ、そうだ。役に立つか分からないけど、『陽の光を多く浴びる事でより熟成し味に深みが増す』って書いてあったかな？」
「陽の光で熟成…ね」

よし、情報も入ったところでひとまず整理といきますか。

先ず『温暖で風通しの良い環境で育つ』という点。この地域は木が生い茂っている所為で少々風通しは悪いけど、気候的には温暖と言って良い。だからこれは問題ない…と思う。

それより気になるのは『陽の光を多く浴びる事でより熟成し味に深

みが増す』という点だ。これが何か重要な要素を秘めているのはほぼ間違い無い。じゃなきゃ普通、図鑑に書くわけ無いんだし。

まぁ、これが収穫前の時なのか収穫後の時のことなのかは分からないけど、恐らく両方ともに該当するとみて良いはずだ。でなければ『陽の光を［　浴びせる　］事で』と書く方が適切なんだから。

そしてこれは図鑑に載せた本人の実体験だろう。きっと実際にその場で食べ比べて判断したんだ。…そうなると、この付近で陽の光を多く浴びる場所は――湖の直ぐ近くに生える樹のどれか。

でも湖はバカでかいし、確認しながら回ってたらそれだけで凄い時間を食ってしまう。何かもう一つの手掛かりを見つけなきゃいけない。

だとすると、最初の情報である『温暖で風通しの良い環境で育つ』……これに何らかのヒントが隠されている。

温暖とはどういう環境下の事を言う？そんなの言葉の通り常に暖かな環境の事だ。今居るこの場は温暖かと聞かれれば、答えはイエスである。

風通しが良いとはどういう環境下の事を言う？そんなの遮る障害が無く風の通り具合が良好な環境の事だ。今居るこの場は風通しが良いと聞かれれば、答えはノーである。多く立ち並ぶ樹に阻まれてそれほど良いとは言えない。

しかし目的の物があるであろう土地は湖の直ぐ近く、障害も無く風通しの良い環境というのは既に作られてるのではないか？……いや、違う。それでは湖の方角から風が吹くときは大丈夫だが、森の方角

から吹くときは大丈夫じゃない。

ではどうあれば風通しが良くなる？　それはその樹だけ他より高く伸びてれば――

「ッ！！？　そうか…！　分かったぞ！！」

「え？　本当？　さっきみたいな冗談じゃなくて…？」

「ホントもホント！　えっと先ずね――」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

・豊穣湖

「なるほど～…それならだいぶ絞りやすいね」

「でしょ？　背の高い樹なら障害になる物も少ないし、十分に風通しの良い環境が作れるってわけ」

移動の間に全部の説明を終え、今は湖の前に立つ俺とコウちゃん。

ここからは2人で手分けして一際背の高い樹を探し、見つけ次第そこまで行って果実を確認する単純作業の繰り返しだ。

「しっかし、情報が無さ過ぎて確実とは言えないんだよな……ったく、図鑑ならもっと細かく書けっての！」

「…ごめん、それはボクの所為だ。リリーちゃんが料理作ってる時、たまたま覗いただけだったから……こんな事ならちゃんと見ておけば良かったよ…」

「…えええぇぇっ！！？コウちゃんそれ図鑑ちゃう！料理本や！！」

「……あ、あれ～…？」

くそっ、道理でおかしいと思ったんだ。図鑑のくせに詳しい分布を書かないで、殆ど豆知識である味についての情報を載せるなんてまず有り得ない。コウちゃんらしからぬミスだぜこれは！

「まぁ気にしないで良いよ。今は時間が惜しいし、さっさと探そう！丁度近くに大きいやつあるし！」

貴重な時間を無駄にしないためにも、急ぎましょうや！…やっぺテンション上がってきた！興奮が止めらんねぇ！1番、ボク歌っちゃいます！

走る～走る～♪オレ～た～ち～♪流れ～る汗もそのままに～♪いつか～辿り～着い～た～ら～♪キミに～打ち明けられる～だ～ろう～♪

「大好き、ってね！！！」

「あ、うん。ありがと」

意外と冷たい反応でした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

捜索開始、８分後。

「あれは形が違う」
「それに凄い赤いね～」
「よし次！」

さらに１０分後。

「あれも違う」
「なんかゴツゴツしてるね～」
「まだまだぁっ！」

さらにさらに１２分後。

「だあぁっ！！お前じゃねぇんだよ！空気読めよ！！」
「あはは～♪あれはあれで珍しい果物だった気がするけどね～？」
「待ってて今すぐ採ってくる」

こうして、俺は珍しいと言われる謎の果物をゲットした。回収後、風に吹かれて危うく落ちかけたときは俺のトカレフも流石に凍りついたのは秘密だ。…ちなみに捜索は依然として続いてます。

さらにさらにさらに２１分後。心身ともに疲れながら、ようやく見つけました。陽の光に反射し金色に輝く――大きな鐘の実を。

「ぜぇ…ぜぇ…やっと、見つけたぜ……！今、行くから…大人しく、待っ、てろ…！！」
「いや、そんな状態で登ったら絶対落ちちゃうだろうし…僕が代わりに行くよ～。だから少し休んでて～」
「だ、だめ…！！コウ、ちゃんに…あんな危ない、とこ、登らせるなんて…お母さん、許しませんよ…！！」
コウちゃんの優しい提案を丁重に断り、何度か深呼吸を繰り返し呼

吸を整えてから遂に高木を登り始めた。木登り自体は子供の頃から慣れてるし、時折吹く突風にさえ注意すれば何も問題はない。

ほんの3、4分程度で頂上付近にまで登り終え、次に目的の実が付いてる枝を探す。陽に当たってる方が美味しいという情報も踏まえて、比較的太い枝に付いてるそれを回収することにした。

「落ちないよう慎重に、慎重に……」

出来るだけ下を見ないように心がけながら、枝にぶら下がる果実を1個1個丁寧にもぎ取っていく。取れた数は全部で5個、これなら喧嘩せず1人1個は食べれる。後はゆっくり戻って降りるだけ――と思ったその時。

「うおっ！！？」

突如として吹いた突風。殴りつけるような強く激しい風が樹を揺らし、俺の身体は危うくバランスを崩しかけた。思わず全身が身震いし、命の危険を必死に訴えている。

「――！！――――っ！！！」

真下ではコウちゃんが何やら叫んでいるが、風に流されて全く聞こえない。表情を見ようにも、やはり遠すぎてダメだ。

兎に角、急いで降りよう。下手をしたら体重で枝が折れるかもしれないし、何より怖い。枝に伝う芋虫のように身体を張り付かせながら、極めてゆっくり後退を始めるが……

「――いてっ！！」

途中、何か棘らしきものが生えていたのか腕に刺さり怪我をしてしまった。その拍子に思わずバランスを崩してしまい――

「っ！！？やばっ――」

落ちた。呆気なく、どうしようもなく、無慈悲に。咄嗟に他の枝を掴んで食い止めようとするも、重さに耐えきれず次々と折れてしまい落下を止めることが出来ない。

本格的にやばいと思った。徐々に地表へ近付いていくという視覚的情報と殴りつける風が巨大な恐怖心を引き起こし、内臓を持ち上げられるような気持ち悪い感覚が不快感をも上乗せする。まるで何かに拘束されてるみたいだ、凄く身体が重い。

どうすればいい？どうすれば助かる？どうにかこうにかポーチを漁って中を見ると、中にはサイフと地図と金属探知機とレア果実１個と目的の果実５個とみんなの寝顔＆笑顔写真ｅｔｃ…

ダメだ、これじゃどうしようもない！このままじゃ下の湖にドボンだよ！確か高いとこから落ちると水は地面より硬いとか聞いたし…

「マスター！！！！」
「え…コウちゃん！！？」

最期の言葉を考えようかとした時。聞き覚えのある声がしたかと思えば、何とコウちゃんが此方に跳んできていた。そんな真剣な顔も出来るんだね、ビックリしちゃった。

そのままコウちゃんは空中で俺の身体をお姫様抱っこのように抱き

止める。助けてくれたんだね、ありがとう！おかげで相当勢いは軽減されたよ！…って言いたいんだけど、より湖の奥に進んじゃったよ？……あ、そっか。あのままじゃ水位が足りなくて湖の底に身体ぶつけちゃうもんね。

「でもそれはそれでマズいことにｇｗｍｄｊあａｇわｔｊ！！！！！」

――――バシャアアアァァッ！！！

大きな水音を立てて、僕たちは水の中に沈む。ちょ、これはこれでやばい！着衣水泳なんて特殊な訓練積んでるわけないし、か、身体が異常に重い！！一生懸命泳いでいるのに全然水面に近付かない！それどころかどんどん底に沈んでってる！！

「！？マスター！！」

先に水面から顔を出してたコウちゃんは、俺が上がってこないのに気付いてすぐさま潜水。伸ばした手を掴んで引き上げようとしてくれてるが、水を含んだ衣服を着る今の俺はかなりの重量、いくら力持ちのコウちゃんでも無理があった。

（くそっ、ダメか…！！）

このままじゃ二人揃って海の藻屑、そんな結末になるくらいならコウちゃんだけでも助けよう。そう決断し、掴んでくれた手を振り解こうとして――

（……え？）

――何かが、俺とコウちゃんの身体を捕まえた。

（な、なに――）

状況を全く理解出来ないまま、直後その何かに引っ張られていく。あまりに急激な勢いで目も開けられず、なすがまま流されてしまった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ようやく分かることになったのは、それから１０秒近く経ったところだ。気付けば地上に引き上げられていた俺は、先ず肺に空気を供給するため大きく息を吸って、そして吐いた。それを何度か繰り返し呼吸を整えたところで、やっと身体を起こす。

「あっ……」

そこで見たのは、水面に浮かぶ１人の女性だった。

身体は鎖骨が見える程度までしか出ておらず、両手で口元を覆いどこか落ち着きの無い様子だが…一目で分かる。とびきりの美人だ。

水の滴る紺碧色の長髪、同色の瞳は気弱そうでありながら純真さも宿している。陽の光を反射する濡れた肌も、人間のものより更に瑞々しい印象を与え、どこか現実離れした美しさを思わせる。

「…なんで、『優詠人魚（マーメイド）』が…」

「マーメイド？」

隣のコウちゃんが目を見開きながら呟いた。どうやら彼女は人間などではなく、極めて遭遇の難しい希少な魔物――マーメイドだったようだ。彼女たちの種族は皆美人が多いと聞くし、だからこそあの人間離れした美しさも納得出来る。

「え、っと…キミが、助けてくれたの…？」

「！！……（コクコク）」

声を掛けた瞬間、肩を震わせて驚いた表情を浮かべた彼女だけど、小さく頷いてくれた。あの時急激に引っ張られる感覚は彼女による

ものだと、今ハッキリと分かった。

「そっか……ありがとう、助けてくれて」

「……（コクン）」

笑顔で届けた言葉に応えてくれたのか、頷いたのち彼女は口元を隠していた手をどけて優しく微笑んだ。その仕草に心臓が高鳴ったのを自覚する。あまりに綺麗で、可愛くて…反則すぎだ。

「…あ、そう言えばポーチ…」

ふと思い出したようにポーチの中身を確認する。サイフも地図も写真もビショビショ、金属探知機は海の藻屑になって消えてしまった。レア果実は奇跡的に残っていたものの、『祝福の鐘』は1個を残して全部水棲生物の餌だ。少しやり切れない思いはあるけど、ここは死ななかったことを喜ぶべきだろう。

「……そうだ。ねぇ！ちょっと良いかな！」

我ながら良い案が浮かんだので手招きして彼女を呼ぶ。人見知りなのか最初は戸惑っていたものの、ゆっくりと此方へ泳いできてくれた。

今の彼女との距離は大体５m、これだけ近くで見るとその美麗な様が更に鮮明に映った。遠目では見えなかった水中の姿もハッキリ見え、胸当てである白いホタテ貝を押し上げる豊かな双丘や、下半身である澄んだ青紫の鱗に包まれた魚の尾が左右にゆらゆらと揺れている。自分でも思わず見惚れてるのに気付いて、慌ててポーチからある物を取り出した。

「…はい！これあげるよ！助けてくれたお礼に！！」

そのまま彼女へ駆け寄って渡したのは、あの時採っておいたレアものの果実。命の恩人なんだからこれくらいのお礼は全然惜しまない。どんな味がするのかは知らないけど、レアなだけあって多分美味しいとは思う。

「あっ……あり、が、とう…」

少し怯えながらではあったけど、その白く細い手は確かに果実を受け取ってくれた。今は両手で包み込むように持ちながら、ジッとそれを見つめている。その姿はまるで、初めて見る玩具を与えられた子供のようだ。

「じゃ、そろそろ俺たち行くね。ホントにありがと！…さぁ行こっ、コウちゃん！」

「う、うん……ありがとう、ございました…」

最後に笑顔いっぱいの別れを告げて、俺たちは帰路へとついた。

…シャリ…シャリ…

「……おいしい」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

・自宅

「はぁー、珍しっ！あの変態がマーメイドを見て発情しなかったなんて」
「まぁ、命の危険がかかってたからね～。それに何て言うかなぁ…本気で見惚れてたんだ」
「へぇ…意外。あの人にもそんな一面があったのね」
「……珍しい」

リビングに揃った４人は今日の出来事について各々の感想を述べていた。ちなみに主は現在シャワーを浴びている。

「ん～…でも珍しいって言ってもさ、みんなの時だって同じような経験してたんじゃなかったっけ？確か結構前に自慢げに話してたような…」
「覚えてない」

「同じく」
「……うん」
「…あ、あははー…」

相変わらず主人に関心を持たない面々である。これでよく主従関係が続くものだと不思議で仕方がない。

「…さて、そろそろご飯にでもしましょう。今日はコウが『祝福の鐘』も採ってきてくれた事だし、腕によりをかけて作るわ」
「……私も手伝う」
「おっ、期待させてもらうわよ～？」
「あはは…少しくらいあの人にも感謝してあげてね～？」

――まぁ、何はともあれ。

「すげー！めっちゃ料理あんじゃん！ありがとリリーちゃん！美味しくいただくよ！！」

この日の夕食は、久しぶりに豪勢なものとなりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9081v/

変態と愉快な仲間たち

2011年10月9日16時14分発行